

十二月の扇 (臘扇) —無用なる我の発見— (前半)

記念講演 毎田仏教センター所長 羽田 信生先生

2013/09/18

では、お念仏ではじめたいと思います。なまんだぶつ、なまんだぶつ、なまんだぶつ、なまんだぶつ...

みなさん、こんばんは。ただいまご紹介いただきました羽田でございます。日頃尊敬してやまない清沢満之先生の臘扇忌の法要へご招待を賜りまして非常に光栄なることと思っております。

今ご紹介ありましたけれども、私は 25 歳の時に米国に渡りました。今から 42 年前ですから、数学力の強い方は僕の年がわかると思います。そして、それ以来、米国で、米国の方々と一緒に親鸞聖人の教えを学ぶという仕事をしております。3 週間ほど前にこちらへ、日本へ、帰ってきておるのですが、最近では日本へ帰るのが、なんとなく外国へ行くような、そんな気持ちがしております。日本のものがすべて懐かしくて、ほんとにこの 3 週間、楽しくて、なんていいですかねえ (笑)、夢の中にいるような気持ちで、暮らしております。

特に何が僕にとって一番、日本に帰って一番うれしいかといいますと、日本は「男性天国」といっていい場所ですから、ともかく男性にとってはいい場所ですね、これ。僕アメリカへ行きましてもう 40 年になりますから、アメリカナイズしまして、アメリカン・ハズバンドになりました。それはどういうことかという、アメリカの女性はたいへん強いですからね、男性、旦那さんは台所の手伝いをしなければいけないです。ですから僕は最近、書齋で過ごす時間よりも、台所で過ごす時間の方が多くなっております。皿洗いしたり肉を切ったりねえ、そういうことですけども。ですから、日本へ帰ってくると一切そういうことしないでいいわけですね、「男は台所なんか入らなくていい」って言いますからねえ、こんないい国はないです。そういうわけでね、まあ幸せといえますか (笑)、ハッピータイムはそんなに続かないですよ、またアメリカへ帰ったらまた、台所で仕事しなきゃいけませんけども。ともかく、アメリカの旦那っていうのは大変です、これはね。いろいろ例がありますけども、奥さんの、そうだね、誕生日を覚えてなければいけない。そして、バレンタインズ・デイを覚えてなければいけない。それから、結婚記念日も覚えてなきゃいけない。そして必ずその日にはプレゼントを奥さんにやらなきゃいけない、ね。もしその一日でも忘れたら、離婚問題に発展しますから (笑)、大変ですよ。日本の男性でね、そんな奥さんの誕生日を覚えてますか？覚えてないでしょう。だいたい旦那は覚えてませんけども。まあ大変ですアメリカはね。まあそんな話はどうでもいいんですけども。

本日、どんなお話をするかといいますと、「真実の自己を発見することの大切さ」についてお話したいと思います。仏教は内省についての教え以外の何ものでもありません。真実の自己を知るこ

とは、私達の人生において最も大切な問題です。仏教において私達が問わなければならない一つの問いは、「私とは何か」あるいは「真実の自己とは何か」であります。清沢先生は『臘扇記』の中でこの皆さんのお手元にこれあると思いますけども、最初の文章ですね、拝読文というものがありますけども、ここに書いてありますね。「自己とはなんぞや。これ人生の根本問題なり」と書いてあります。また、先生の『他力信仰の発得』という作品がありますけども、そこで先生は「吾人はまず、おのおの、自己の何者たるかを知らざるべからず」と言われております。真実の自己を知ることが私達の人生において最も重要な問題であるばかりでなく、これは最も困難な問題でもあります。その困難さは、私達がもうすでに自己を知っているという風に思っているからです。ですから私達は内省する必要を感じないわけですね。ところが、釈尊は、私達が自己を知っていると思っているけれども、実は私達は自己に関してまったく無知であるということ、私達に教えてくださるわけですね。そして、もし私達が自己に対して無知であり、正しい自己の見方を持たないならば、私達は、真に充実した意味のある人生を生きることは出来ないという風に、釈尊は私達に教えてくださるわけですね。

では、これからどのようなお話をするかといいますと、お話の前半では、「内省とは何か」「真の自己発見とは何か」ということをお話したいと思います。そのために、釈尊と清沢満之先生が、いかに自己を内省し、真の自己を発見されたかについて、お話したいと思います。それから、しばらく休憩して、休憩の後で、後半のお話として、私が昔見たお化けの映画があるんですが、そのことについてお話して、その後で、昔 NHK の『こころの時代』の番組で知った西村英雄さんという人についてお話したいと思います。その映画と西村さんのことについてお話するのは、それらが私に、釈尊と清沢先生の内省の教えについてですね、さらに深い教えを僕に与えてくださったからであります。

ではまず最初に、二人の歴史的先人、すなわち釈尊と清沢先生が、いかに自己を内省し、真実の自己を発見したかをお話したいと思います。釈尊と清沢先生は、真実の自己を発見することで、真に意味のある充実した人生を生きられました。まず、私達が自己ということを使う時、二つの自己ということが考えられます。その一つは、「私達が自分がそれであると考えてる自己」です。私達が勝手に考える自己ですね。なんとなく自分の中に、良い物がある、なにかこう「核」といいますかね、変わらない良い物があると、そういう風に私達は勝手に考えますけれども、それがまず最初の自己ですね。そしてもう一つの自己は、「私達が真にそれである自己」です。釈尊と清沢先生は、前者は誤った自己であり、後者が正しい自己であるということ、私達に教えて下さいます。そして、私達が、その最初の自己の見方からですね、すなわち私達が考えた自己というものから、二番目の自己すなわち、私達が真にそれである自己へと移らなければいけない、という風に教えてくださるわけですね。最初に、釈尊がどのように自己を内省し、誤った自己の見方から正しい自己の見方に移ったかについてお話させていただきます。

釈尊がお城に住んでいた頃、人生が苦に満ちていることを悟りました。老病死のような苦が自分の思うようにならないということを知った時、釈尊はたいへん落胆し、生きる望みを、生きる意欲をですね、失ったわけです。そして、苦を克服する道を見なければならぬと考えて、王子としての生活を捨てて、求道者になったわけです。それから釈尊はあらゆる修行をされました。しか

し、それらの修行に六年の歳月を費やしたのち、それらの修行は、問題を解決しないという結論に達しました。ですから、最後の手段として、釈尊は菩提樹下のもとに座って冥想されます。そして、なぜ私は苦しむのか、苦の原因は何なのか、と問います。そして、自己に対する無知が苦の根本原因であるということを悟られました。自己の正しい見方を持たない限り、問題の根本解決はないと釈尊は考え、内省を深めていったのです。釈尊は、菩提樹下で内省をはじめ、それほど時間が経たない時ですね、お悟りを開いたと言われていました。

では、釈尊のお悟りの内容は何だったのでしょうか。それは、「縁起の法」を発見されて、その縁起の法と一つになるということが、お釈迦様の、釈尊のお悟りの内容であったと言っていいわけです。釈尊は後に、「私に私を見る者は私を見ない。私に法、すなわち縁起の真理を見る者が、私を見る」という風に言われました。「私に私を見る者は私を見ず、私に法を見る者が私を見る」という風に言われました。そして、この縁起の真理は、すべての事物・物事が「縁」、条件によって存在するということでもあります。この真理は、釈尊が悟られる前にですね、釈尊が考えていた、この自己というものをですね、徹底的に否定したわけです。釈尊は自己の中に、永遠に変わらない独立した何か、実体といますか、そういうものがあるという思いを持っていたわけですけど、この縁起の真理がそれを徹底的に否定したわけです。釈尊は今や自分の存在全体がですね、自分の身体も心も、「縁」の集まったもの以外の何ものでもない、ということを悟られました。自分の身体が無数の縁によって成り立っているということを悟られたわけです。身体は、空気や水や食べたあらゆる食物で成り立っています。そうですね、私達の身体というのは、私達の身体の外に存在するものですね、食べ物、野菜とか肉とか魚とか、そういうものがですね、みんなそこから集まってきて、私達の身体をこう形成しているわけです。釈尊は自分の身体を見てですね、それを悟られたわけです。無数の縁がですね、条件が集まって、「身体」という風に呼ばれている。例えば、空気とか太陽の熱とか、そういうものがなかったら私達は数分の間も存在することはできないわけです。さらに、釈尊は、私の心も私の外から集まってきた「縁」によって成り立っているのではないかと問われます。そして、心は、釈尊はですね、心は人生において自分が出会った人々、先生とか親とか友達によって、与えられた無数の考えとか知識の集まりに他ならないということを知ったのです。もしそれらの人々が存在しなかったら、釈尊の心というものは何もないわけですね。私達の心もそうですね。みんな私達がお習いした先生とか友達とか、あるいは読んだ本とか、そういうものが私達の心というものを形成してるわけです。

ですから、このように釈尊は自分の身体も心も無数の「縁」、無数の人々やものによって形成されていることを悟られたわけです。これが釈尊が得た「自己の正しい見方」と言っていいわけです。すべてが「縁」であってですね、自己の中に変わらない独立したものは何一つないということを悟られたわけですね。縁起故に、変わらない独立したこの確固たるものといえますかね、そういうものは私達にない、ということをお釈迦様では「空」という風に言うわけですね。「そら」という字を書きますけども、「空」と言うわけですね。私達が普通自分の中に何か変わらない独立したものがあると考えますが、釈尊はそれは存在しない、とおっしゃいます。私達がこう愛し、執着している変わらないものとしての「自己」というものは、幻想であるという風に釈尊は私達に教えてくださるわけです。

この「空」なる自己を知ることが、「真の自己」を知ることと書いていいわけです。空なる自己ですね。これが私達の自己の真相です。しかし、ここで大切なことは、真の自己には、この私達の真の自己には、否定的・消極的な面と、極めて肯定的・積極的な二つの面があるということを知らなければいけないと思います。単に「空」ということは、単に私達の自己というものが、空であるという、否定的な・消極的な面のみをするのは、充分でないんです。これは、本当の自己の真相を見たことにならないのですね。実体が否定されて、それが無いということは、自己が単に「空っぽ」あるいは「バキューム」(vacuum)「真空」になったという、そういう意味ではなくですね、私達の真実の自己というのは、外にあると思っていた人々や物事のすべてが、自分のなかに「ある」と気づくことなのです。私達が考えるような自分はない、実体はない、ということは、実は、私達の中身は、外に存在する無数の人々・物事が私達を形成している、という風に気づくことですね。ですから、この本当の自分を知るということは、自分の中にある豊かな現実を知ることになるわけですね。いままで外にのみあると思っていた人々や物事すべてがですね、様々な「縁」がですね、私の身体となり、あるいは心となっている、ということを知らなければいけないわけです。それらすべてが、私が存在していることを可能ならしめている、ということに気づくということが、これが本当の自己のあり方を知ることになるわけですね。私達が考えた「我執の自己」というのは、外にある人々とか物と対立する自己です。ところが、この「真の自己」はすべて、本当の私というものはすべて、外にある人々や物を包む自己ですね。それと一体なる自己です。世界に存在するものはすべて、私の中にあり、私の中にあるものはすべて外にあるという、この自覚ですね。「私は衆生であり、衆生は私である」と、こういう風に見るのが本当の自己を見るということになるわけです。単なる空っぽの自己を知ることではなく、極めて豊かなこの自己ですね、これに気づくということです。

私達を形成しているすべての人々や物は、刻々と変化し、動き流れているものです。それらは「大いなる命の流れ」といってもいいわけですね。「この世界全体が、大いなる命の流れである」という風に書いていいわけです。考えてみたらそうですね。すべて存在するものは何一つ停滞しているものはないわけです。固定したものはないわけですね。常に瑞々しく、常に新鮮です。ですから、今世界は、すべてのものがですね、大いなる命を形成すると言っていい、という風に言いましたけれども、それを考えますと、私達の自己もですね、よく見ますと、常に変化し動き流れているものです。ですから、私達の本当の自己というものは、非常にダイナミックな「流れ」と書いていいものと思います。プロセスですね。真の自己というのは、「プロセスそのもの」であるという風に書いていいものだと思います。ですから、私達の存在全体がですね、変化し動き流れているということは、私達のこの「真の自己」というものは、常に流れ動いているということは、私達のこの道を求める自己ですね、求道者である自己が、私達の本当の自己である、という風に書いていいと思います。ですから、釈尊がこの「縁起の法」、あるいは「無常」、「世界の大きな命」に気づいた時ですね、釈尊の生き様というのはですね、ある意味で、求道者になったという風に書いていいわけですね。古い固定した意見とか考えとか主張というものにとらわれなくですね、そういうものから救われてですね、刻々と変化する命の一つとなったという、これが釈尊のお悟りの内容であったという風に書いていいわけです。ですから、釈尊に私達はレッテルを貼ることはできないわけで

す。すべてそういうレッテルから釈尊は自由になった方ですね。しかしあえて僕が釈尊に一つのレッテルを当てはめるとしたら、それはどんなレッテルかと言いますと、それは「謙虚な力強い求道者」、これが私達が釈尊につけることのできる唯一のレッテルであるという風に言うことができます。釈尊は、この世界全体がですね、極めてクリエイティブな、創造的な世界であって、自分がその創造的世界の、創造的な要素であるという風に、自己を見られた。あるいは、この世界がですね、大いなる命、新鮮なね、瑞々しい命の流れであって、その瑞々しい命の流れの一部としてですね、釈尊は生きられた。ですから、釈尊の生き方というのは、非常にダイナミックな力強い創造的なものであったわけですね。

以上、釈尊のこの「真の自己の発見」ということについて、お話したわけですが、次に、清沢先生がどのようにして自己を内省し、真実の自己を発見されたかということについてお話させていただきます。

清沢先生は、ここにあの清沢先生の年譜がこのプログラムの後ろにありますから、それをご覧になったらいいと思いますけども、清沢先生は、明治政府が始まる5年前ですね、1863年に生まれました。そして、先生は、下級武士ですね、足軽の息子として生まれたわけで、家庭は非常に貧しかったです。そして、特に明治政府になりまして、侍がみんな廃業になったわけですから、非常に先生の家というものは、非常にね、生活が苦しかったわけです。ですから、高等教育を受けるような状況には、先生はおられなかったわけですね。ところが、幸いに、真宗大谷派が先生に奨学金を与えてくれましたので、先生は勉学を続けてですね、東京帝国大学、現在の東京大学に入って、西洋哲学を勉強するという事になったわけですね。先生はいつもクラスのトップだったので、同級生たちはですね、先生は大学の教授になるだろうと、まあ、みんな思ってたわけですね。しかし、26歳に先生がなられたとき、大学教授になるという輝かしい未来を捨ててですね、真宗大谷派によって経営されていた、京都尋常中学校の校長になったわけですね。これなぜ先生がこの職を受けたと言いますと、先生は大谷派から奨学金を頂いていたわけで、先生は大谷派に対して、非常に深い恩義を感じておられたわけですね。ですから、先生は喜んでその尋常中学の校長になられたわけですね。

そして、先生が32歳になったとき、肺結核にかかったわけですね。これはなぜ肺結核にかかったかと言いますと、清沢先生は、釈尊の体験を、まあ禁欲生活と言いますかね、その体験を追体験しようとして、非常に厳しい禁欲生活を続けたわけですね。そのために、肺結核になってしまったわけですね。当時、肺結核は不治の病ですね。そして、友達の方々が先生に療養を勧められてですね、垂水というところへ行って療養されて、そして、やや体調の回復した2年後ですね、先生は真宗仏教教団を改革する運動に没頭したわけですね。

そして、35歳のときに、この改革運動は失敗してしまったわけですね。そして、先生は、東本願寺から除名処分を受けました。そして、その時、中学校でのこの教職も失われたわけですね。最初は校長でしたけども、禁欲時代、禁欲の生活をした頃からですね、先生は、普通の平教授、平教諭ですか、になっておられたわけですね。しかし、その職も失ってしまったわけですね。それから、先生は自坊に帰られて、先生が36歳になった年は、先生の信念の確立に関して最も重要な年になったわけですね。

しかし、その年はですね、先生にとって大変苦難の多い年でもあったわけです。どんな苦難があったかといいますと、今言いましたように、先生は真宗教団の改革に失敗して、教職を失われたわけです。そして、自坊に帰ったと言いますが、これは自坊と言いますが、これは先生が養子として入ったお寺ですね。清沢先生は、自分の生まれた時の名前は「徳永満之」ですね。徳永家に生まれたわけですが、後に清沢家に養子として入ったわけですね。ですから、自坊に帰ったと言っても奥さんの実家に帰ったということですね。ですから、そのお寺には奥さんのお父さん、先生の養父がまだ住職でおられたわけですね。ですから、そのお寺は、先生を必要としなかったわけです。ですから、非常に肩身の狭い生活をされた。その上、清沢先生の実のお父さんもですね、そのお寺に引っ越してきたわけです。そのことも先生の悩みの一つになったわけですね。先生のお父さんと清沢家との人たちとの関係がうまくいっていなかったという、そういうこともあるわけですね。そして、そのお寺の檀家の多くの人たちがですね、先生を本山に反旗を翻した反逆者だという風に考えていたわけですね。ですから、檀家の中の何軒かの人たちはですね、先生が家の法事に来ることを断ってきたわけですね。当時先生はまだ結核を病んでますから、時々血を吐くわけですね。そういうこともあったり、あるいは、清沢先生の話は難しくわからないという、そういう不満もあったわけですね。

ともかく、この先生が36歳の年は、大変な年ですね。先生はこの「人情の煩累」という言葉で、この苦悩といいますかね、この苦難のことを表現されてますけれども、しかしですね、この苦難はですね、先生の内省を深めていったわけです。そして、この年がですね、先生のいわゆる信心と言いますかね、信心が確立した年という風に考えてもいいわけですね。この苦しみによってですね、人生の苦しみの根本原因を先生は突き止めていかれたわけです。そしてこの、ついにですね、「苦の根本原因は自分が自己の真相を知らないことである」ということに気づかれたわけです。そして、「真の自己は縁起そのものである」ということを悟られたものと思います。ちょうど釈尊が縁起という真理を悟られたようにですね、先生はこの自分が考えていた自己の虚しさですね、自己の虚しさということを発見したわけです。「自分に変わらない独立した何かがある、実体がある」という考えの誤りを認めたわけですね。

先生は、この真実の自己について書かれた文章がたくさんありますが、皆さんに差し上げた資料、僕がお作りした資料ですが、ページに5つの文章がありますが、このまず最初の文章ですね、この文章を読みますと、清沢先生がですね、やはり釈尊の縁起という真理ですね、釈尊の悟られた縁起という真理を深く理解されていたということがよくわかります。で、ちょっとこの最初の方を読みたいですと言いますが、一行目の下からですね。

「吾人は、空気や日光や山川や草木や鳥獸や他人やをもって、吾人より別離せる外物となすにあらざるなり。然れども、吾人は空気なくして生存する能わざるなり、日光なくして生存する能わざるなり。」

という風に先生書かれています。これは、どういうことかといいますと、先生は自分の身体とは何かということをおられる。身体は、私の身体は、縁起によるんだということをお先生はここで言われているわけですね。先ほど言いました、外にある空気とか日光とか、そういうものですね、そういうものがなければ、一瞬として私は存在することができないんだということをお先生

言っている。身体のことを言ってますね。そしてそれから2行目、3行目ほど先に、

「さらに吾人の精神界につきてこれをいえば、吾人の精神内に存するところの知識思想の多くは、これ吾人以外の人物について得來るところのものにして、彼の人物なかりせば、決して存する能わざる者たるなり。」

という、先生はここで自分の心のことを言ってるわけですね。私の心というのは何であるか。そして、考えてみると自分の心というのは、自分が会ったいろんな人達ですね、その人達の考えとか、意見とか、知識とか、そういうものが自分の中に集まってですね、私の心というものを形成している。だから、「彼の人物なかりせば」、私がお会いしたそういう人たちがなかったら、決して私には心というものがないんだということですね。ですから、先生はここで「縁起」という言葉は使いませんが、自分の身体も心もですね、この「縁起」、私の外に存在する条件が、私の存在全体を形成しているんだということを、先生はここで言われてるわけですね。そしてこの心の動きというものを、先生は、どのように理解されたかと言いますと、やはり私達が考えるということですね。私達が考えるということはどういうことかということ、考えるということは、これ縁起によって、私達は考える。私達に変わらない心というものがある、その心が考えてるのではなくて、縁起が私達を考えせしめているんだという風に、清沢先生は言われるわけですね。それが次の文章です。

「一色の映ずるも、一香の薫ずるも、決して色香そのものの原起力に因るに非ず。皆彼の一大不可思議力の発動に基づくものならずばあらず。色香のみならず、我等自己そのものは如何。その從來するや、その趣向するや、一も我等の自ら意欲して左右し得る所のものにあらず。ただ生前死後の意の如くならざるのみにあらず、現前一念における心の起滅、また自在なるものにあらず。我等は絶対的に他力の掌中に在るものなり。」

この最後の二つの文章ですね、これが非常に大事ですね。「現前一念における心の起滅、また自在なるものにあらず。我等は絶対的に他力の掌中に在るものなり」ということですね。ここで先生は、私達は完全に「他力の掌中」、手の中にあるという風に言われます。この「他力」という言葉は、先程から言っている「縁起」という真理のことを言うわけです。そうですね、仏教では、この「他力」ということは「縁起」ということなんです。私達は、私達の心は、独立してそれ自身で動いているという風に思っていますけれど、実は「縁」が、「他力」なんですね、私達の心の動きを決定しているわけです。「縁」がですね、私達の考えを決定しているわけです。もし私達が、私達の心がそれ自身で自立的に動いていると考えるなら、それは事実ではないわけです。ここで、先生は、「現前一念における心の起滅」、今の私達の心の動きということですね、今ここでの心の動きというものは「また自在なるにあらず」、私達が思いたいから思うわけではない、というわけですね。条件によって、「縁」によって、私達が思っているんだ。「我等は絶対的に他力の掌中に在るものなり」ということによって、先生はそういうことによって、私達が独立した自立した心を持っているという風に考えることは幻想である、そんな独立した確固たる心というものは、実体的な心というものは、私達はもってないと、そんなものを持っていると考えるのは幻想なんだ、という風に清沢先生は言われるわけですね。

例えば、今、皆さんがこう考えておられる。心が動いているわけですけども、これは今僕が話していることを皆さんがこう考えつつ、思いつつ考えているわけですね。ですから、僕の言葉の流れ

にそって、皆さんの思いが、念がですね、動いてるわけです。で、仮に今外から大きな「ドカーン」という音がね、聞こえてきたとしたら、僕のしゃべっていることより、むしろ皆さんの心はそちらの方に行くわけです。でしょ？ですから、この私達の心の動きというのは、「縁」によってですね、そうですね、私達が自分には確固とした変わらない自立した心があるんだと思っっているけども、実は心の真相というのは、「縁」によってですね、私達が見たり聞いたり嗅いだり食べたり、そういう「縁」によって、その「縁」によって、私達は考えるわけです。私達の一念一念の思いが、まったく「縁」によって、「他力的に」なされている、という風に清沢先生は言われるわけですね。ですから、ここでもやはり「他力」ということ、あるいは「縁」ということを言われるわけです。ですから、私達が「自力」ということはね、「自力があるんだ」「もう、確固とした自分の心があるんだ」と考えることはですね、妄想だという風に言うわけですね。これは釈尊も清沢先生もまったく同じことを言われるわけですね。

そして、ここで今回の僕のお話のタイトルに書いておきましたこの「臘扇」という言葉について、ちょっと考えてみたいと思いますけれども、この「臘扇」というのは皆さんよくご存知のごとく、これは「十二月の扇」という意味ですね。清沢先生はこれを自分の号ですね、ペンネームとして使われたわけです。そして、この「十二月の扇」というのは、「まったく役に立たないもの」という意味ですね。「無用の長物」という意味です。これは、お分かりの通り、扇はですね、今みたいな暑いときはね、非常に便利ですけれども、12月の寒い時にですね、扇をやっても誰もね、これが有用なものであるというようには考えないわけですね。ですから、その「臘扇」というのは「無用の長物」という意味になるわけですね。「十二月の扇」というのは「無用の長物」ということになります。

で、この「臘扇」ということの意味ですね、そのことをちょっと考えてみたいんですけども、これは、先生が先ほどお話した自坊においてですね、自分がいてもいなくてもいいもの、ですね。あるいは自分が無用な存在であるということ、直接的には意味するわけですけども、私はもっとそこに深い意味があると思うのです。先生は単に家庭において、あるいはお寺において、自分が無用者であるということと言われたのでなくてですね、先生は人間存在そのものがですね、「無用性」を持っている、あるいは「空」ですね、「空性」、あるいは実体のない「無実体性」を持っているんだという風に、そういうことを先生は表現されているんじゃないかと思うわけですね。人間の「無用性」、あるいは「空性」、あるいは「無実体性」というものを表現されているんじゃないかという風に思うわけです。先生は、この縁起の真理故に、私達の考えている自己そのものが無用なもの、あるいは空なるものであるということを知られたのだと思います。

このように、縁起の真理は先生の自尊心ですね、自分が重要であるという考えを徹底的に否定したわけですね。先ほどの言葉で言うと、自分が勝手に考える、私達はね、自分がいい人間であるとか、自分が重要な人間であると考えますけれども、そういうものを縁起の真理がですね、徹底的に否定したという風に言っいいわけです。ですから、そのことをですね、先生が「臘扇」という言葉で表現したという、そういう意味があるんだと僕は考えるわけですね。ですから、この語を使われるということは、先生が非常に「頭を下げている」と言いますかね、今まで考えていた自己というものが打ちのめされたというか、そういうことが表現されているわけです。非常にある意味で否定的な表現になるわけですけども、しかし、この否定的な表現である「臘扇」ということがですね、

ある逆の方向からみますとですね、これは同時に「大いなる解放」といいますかね、「大いなる救済」というものも語っているという風に考えることができるわけですね。まあ否定と肯定と言いますかね、その二つの面がこの「十二月の扇」という表現の中に表現されていると思います。

今さきほど読んで(きた)この5つの文章がこの紙に書いてありますけども、この3番目の文章のことをお話したいんですけども、この文章の中にですね、僕はその極めて悲しい否定というものとですね、それとその否定から実現される解放感と言いますかね、そういうものが、この2つのものが、体験されている、先ほどのね、「臘扇」という言葉の中に否定的な悲しさと、それと喜ばしい「解放感」が表現されているということを言いましたけども、まさにこのこの文章ですね、今から読みますけども、これは「信心体験」という風に言っていると思うんですけども、この「信心体験」というものをですね、清沢先生はこの小さな男の子がお盆を運ぶ喩え話で語っておられるわけです。信心体験をこの小さな男の子がお盆を運ぶということで、先生は表現されているわけですね。

これはどんな話かと言いますと、非常にまあ気になって先生が言われますけども、分り易いというか、簡単な喩えですね。これはある日、ある家庭にですね、お客さんが来たわけですね、珍しいお客さんが来たということで、家族がこぞってですね、このお客さんをもてなすわけですね。そして、そこに3歳位の小さな男の子がいるわけです。そして、家族の皆がですね、お客さんを接待しているのを見て、自分も何かそのお客さんに接待したいという風に思うわけですね。そして、台所へ行きまして、行くとそこにお盆があつてですね、その上にたくさん料理が置いてあるわけですね。そしてその子はですね、そのお盆をこうそのお客さんとこに持っていこうと考えるわけですね。しかし、どう考えても小さな子でね、体の半分くらいある重い物を持って行くことはできないわけですね。しかし、自分では出来ると思ってそれを持ち上げようとする。すると、その子の背後にですね、お母さんがいて、「ああ危ない」というんで、お母さんがすぐその子の後ろに来て、お母さんがですね、後ろの方から両手を伸ばしてそのお盆を持ってくわけです。そして子供はそれを知りませんからね、自分の持っていると思って、そのお客さんの方へお盆を持っていくわけですね。そして、その数歩あるいてそのお盆を持っていくんですけども、そのときはですね、自分がこのお盆を落としてはいけないと非常に緊張してるわけです。そして、しばらく歩いて行くとなんか後ろの方から息がねえ、かかってきますから「あれ、誰かが後ろにいるんじゃないか」というんで振り返ってみると、お母さんがそこにいてね、お母さんがお盆を運んでるわけです。そしてそれに気づくとですね、「あ、自分が運んでるんじゃないんだ。お母さんが運んでたんか」といってがっかりするわけですね。自分が運んでいたと思っていたのにお母さんがやってたんかということでね、そういう風に考える。しかしそれでまあ、気づくことは、そのほっとするわけですね。自分が手を離れたってお盆は落ちませんからね。だからその解放感というかね、そういうことも感じるわけですね。

このようにですね、清沢先生はこの「信心体験」というものを、この簡単な喩えで語られるわけですけども、この簡単な話の中にですね、先ほどから言ってますこの「否定的な面」と「肯定的な面」があるわけですね。あるいは、この「自己が否定される面」とですね、そして「自己が解放される面」という、この二つの面があるわけですね。そして、この「否定的な面」「自己が否定される面」というのが何かと言いますと、その男の子がお盆を持っていたとき、自分がですね、自分にこ

の力があってね、「これ私がやってんだ」という誇りが、プライドがあるわけですね。しかし、お母さんがやってるということに気づいた時に、そのプライドが崩されるわけです。ね、がっかりするわけです。悲しいでしょう、やっぱり。自分がやってたと思っていたのにそれが「あ、お母さんがしていたんか」っていつてね、プライドが崩れる。それがこの否定的なね、自己の力が否定されたということになるわけですね。「いい、素晴らしい能力がある」と思ってたのが否定されたわけですね。で、もう一つの反対の「肯定的な」あるいは「解放的な面」はどういう面かと言いますと、これは先ほども言いましたけども、お母さんがお盆を運んでのを見た時にですね、悲しさと同時にですね、解放感を感じるわけですね。「たとえ自分がこの手を離してもお盆は落ちない」。それまでは緊張してるわけですね。私がこれをしなかった時ね、思わず落としたらどうなるんだろうって不安感と緊張感があつたわけですけども、その不安感と緊張感から自己が救われるわけですね。

ですから、この話の中に、中っていいですか、この話に関してですね、もし私が真宗の用語を使うとしたらですね、その男の子の力は「自力」を象徴しているわけですね。そして、お母さんの力は「他力」を象徴、あるいは「縁起の真理」を象徴しているわけです。そして、この物語で清沢先生は、自分のこの目覚めの体験を表現してるわけですね。あるいは、自分がこの目覚めを体験して、その目覚めによって実現された自由な、身軽なですね、のびのびとした生活を描いているという風に言ってもいいわけですね。自分が努力して、ですから、簡単に言ってしまうと、自分が努力しているから生きているんじゃないんでですね、生かされているから生きているんだ、というそういう自覚ですね。今まで自分が責任感というかね、努力してるから生きてる、しかし、よく考えてみたら生かされている、他力、縁起によって生かされているから生きてるんだという風に、こう考えが転換してきたわけですね。そういうことがこの簡単な物語に表現されているわけです。

さらにですね、いつも僕はこの「臘扇」という言葉と合わせてですね、この「落在」という言葉を思うんです。清沢先生はこの「落在」という言葉を使われますね。これは先ほどの臘扇忌のこの拝読文ですね、この先ほど読んだ文章の次の文章ですね。

「自己とは何ぞや。是れ人生の根本問題なり。」

というこれが問いですね。これが問いです。これが仏教はこの問い以外ないですよ。内省って、仏教は内省のみってことは、この問いだけが仏教なんです。ね。「自分が自分をどう見るか」っていうことが仏教なんです。ね。「自分が人をどう見るか」とか「人が自分をどう見るか」ということは仏教じゃないんですよ。一切そういうものは仏教じゃない。「自分が自分をどうみるか」「自己とは何ぞや」っていうことね、「内省」、これだけが問題よ。ね。それで答えは「私はなにになにである」っていうのが答えなんです。ね。英語っていうか、まあ、文法でいうとね、一人称の単数っていうでしょう。ね。「I」ということですよ、「I」。ね。「What am I?」っていうことですよ。答えは、「I am なになに...」って、ね。「私は何?」答えは「私は...」ってね。だからこの主語をいつも「I」っていう風に考えないで、「我々人間は...」とかね、「我々仏教徒は...」とかね、「我々」とかそんなこと言ったら仏教ではないですよ、これはね。仏教は「内省」「自己とは何か」「私は何か」他ならぬ「私」ですよ。ね。これが仏教なんです。だから答えはね、問いはこの「first singular」って言って、まあ第一人称で単数ですね、答えも必ず「私は」って言わなかったら答えにならない。だから、ね、親鸞聖人は「私は悪人だ」、ね。釈尊だって、「無」とか「空」とか「縁起」って言っ

たのは、あれは「私が空だ」ってならなかったら駄目なんですよ。ね。「人類が空だ」とか「このデスクは空だ」とか「この本は空だ」とか、そんなものは仏教というんじゃない。「私が」っていうことが、「私が」縁起なんです。ね。「私が」空なんです。この「私」ってものがつながらなかったら仏教とならないんです。ですから、この答えは、ですからね、「私は」っていうんです。

「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の境遇に落在せるもの、(即ち)是なり。」

ってことは、清沢先生はここで「私は落在者だ」ってことを言ってるわけです。ね。他ならぬ。人のことを言ってるんじゃないですよ。一般化して言ったわけじゃない。だから仏教が(話題に?)上がった時に、根本的な私達、間違いつてことを犯すのはね、一般化するんです。ね。一般化したら、仏教じゃない、それは教養です。教養です。仏教ってのはあくまでも「この私はなんだろう」と。ね。私のこの苦しみの原因は、「私の」苦しみの原因は何かと、これがねえ、問題にならなかったら仏教 100 年 200 年勉強したってね、なんにも身につかないですよ。釈尊が言ったことも、親鸞聖人が言ったことも、なんにもわからないですね。釈尊も親鸞聖人も「私が無常だ」「私が縁起だ」「私が愚か者」で「私が悪人だ」っていう、主語がね、一人称単数なんです、これ。ねえ。これ当たり前のことで、基本的なことですけどね。ここから出発しない人がいっぱいいるんだ、仏教勉強してもね。ね。だから頭でっかちでね、教養ばっか増えてくけども、自分のこと何にも知らない。ね。こんな学びしてたってほんとに駄目ですよ、これね。

まあ、あんまりこんなこと言ってるって時間なくなるからこの文章読みますけどね。この、ここにあるでしょ。この「落在せるもの」。ね。この「落在」って言葉がね、また大事な言葉ですね。これは、大地に落っこっちゃったって意味ですね。うん、そうですね。落っこったって意味です。これで清沢先生は自己を表現してるわけですね。先生が遭遇したいろんな苦難とか、あるいは先生が先人から頂いた教えがですね、先生の自己が、自分が重要だと思ふ思いをですね、悉く打ちのめしてですね、先生をこの叩きのめしたというかね、無用者の大地にこう打ちのめしたわけですね。そのことを、清沢先生は「落在」という言葉で表現しているわけですね。「自己とは何ぞや」の答えです。「私は落在者だ」ってね。ですから、この言葉の中にですね、清沢先生がどのように自分を見たか、ね、先ほどの「臘扇」とか「無用者」ということと同じ言葉です、これはね。自分が今まで高みに自分を置いていた。教養人であるとか、学者であるとかね、宗教家であるとか、そういうことが全部が叩き潰されたということですね。「大地にもう突き落とされた」っていう意味です。「普通の人間なんだ」ってことだね。そういうことですよ。

しかし、これがですね、清沢先生の救いだったわけですね。さっきの自力の虚しさを知ったことが、自力からの解放点であったということと同じことですね。そして、その私達の自力というのは、自分が善人だと思ふ、自分が重要な人間だと思ふ思いのことをいうわけです。ねえ。だから、何が私達を苦しめているかというね、これは自分がね、善人であるとか重要な人間であるとかね、社会的に、宗教家としてとか、いろんな意味でね、そういう自意識というかね、まあ言ってみれば「高上りした」というかね、それが徹底的に落とされたってね、この「落ちた」ってことが先生の救いなんです、これがね。そのことをこの最後の文章にね、ここにもう一つありますけども、これね、最後の言葉ね。これはそうだね、全部読んでみましょうかね。

「進んでいえば、宗教の門に入ったものは、自分の価値をレイ位におくのである。故に、軽んずるの重んずるの、というところではない。ほとんど自己の価値を認めないのである。全体、私ども人間が苦しんだり、悲しんだりするのは、つまり自分というものを大事がっているからである。自分をないものにしたならば、苦しみも悲しみもないはずである。すでに自分をないものにしていただければ、人が侮ろうが、貴ぼうが、軽んじようが重んじまいが、そんなことにはいっこう無関係である。重んずるものをして重んぜしめよ、軽んずるものをして軽んぜしめよというように、いっこう何ごとにも平気さん(?)で通れるのである。」

という風に言ってますね。ですから、先生はここで、もし人が自分を重要な者で考えるなら、その人はその自惚れの意識の故に、苦を体験するに違いないと言われるわけですね。しかしながら、もし人が自分を重要でないと考えれば、その人はより少ない苦を体験すると言われるわけです。より自分を重要と考える人はより大きい苦を体験し、より多いこの我執ですね、自己愛を持つ人はですね、より多く苦悩を持つという風に先生は言われるわけですね。ですから、先生は人間の苦悩は誤った自己の見方によるのだ、ということと言われるのです。ね。自分を本当に忘れない(?)、自分を誤って理解してる、それによって苦悩が生じる。ですから、私達はですね、仏教において、私達の人生を左右するのは、私達が苦勞するとかしないとかいうことはですね、人生を左右するのは、人ではないんです。事件じゃない。私達の外にいる人とか事件じゃない。私達自身、私達自身が自分をどう見るかということ、このことが根本の原因なわけです。そうですね、どんな人生を生きるか。だから、私達が苦しい人生を生きるか、あるいは喜びと感謝に満たされた人生を生きるということですね、私達が自分自身をどのように見るかということね、これが決定的なことなんです。だから、清沢先生は、ね、内省あるのみ、内観あるのみ、ということと言われるわけですね。

そういうわけで、私はこのお話の最初に内省がいかに重要であるかということをお話しましたがけれども、とにかくこの自分の正しい見方ね、これを持たなきゃいけないわけですね。私達の人生における苦の原因は、真の自己に対する無知であるということです。私達の苦の原因を他に求めてはいけません。私達自身が苦を作っているわけです。ね。私達の誤った自己の見方が苦の原因ですね。そういうことになるわけです。

そういうわけで、まあ、仏教はこの「縁起の真理」ということを私達に教えるわけですね。あるいは、この「空の真理」ということですね。これは、こうお分かりになるとは思いますけれども、非常に厳しい真理ですよ。ね。「否定的な真理」、あるいは「冷たい真理」ですね、冷たい真理だと思えますね。私達がこの無常の、無常で、縁起とか空の真理っていうことはね、なかなか受け入れがたい真理です。しかし、これは真理ですからね、釈尊の説かれた事実の(事実を)説いてるわけですね。そして、私達が自己の虚しさを知るならば、私達は大いなるこの救済ですね、解放感を体験できるわけです。そして、非常に大きな世界に生まれることができるわけですね。私達は何から作られるかということね、自己の「過大視」、自分を過大視してるわけですね。自分が善人であるとかね、そういうことから私達は救われる。ね。状況とかあるいは人々から救われるんじゃないよ。私達は自己愛から、あるいは自尊心から、救われるわけですね。私達を不自由にしてる根本原因は、自分を重要であると、ね、善人であると、そういう思いですよ。ねえ。ですから、清沢先生は、この自己

を「無用者」あるいは「落在者」という風に徹見したわけですね。その徹見がですね、清沢先生をしてですね、極めて自由な広々とした世界に生きることを可能にしたわけですね。

そういうわけで、ま、前半はこの釈尊と清沢先生のお話をさせていただきました。ここで10分ほど休憩しまして、また次の後半に入りたいと思います。それじゃあ、なまんだぶつ、なまんだぶつ、なまんだぶつ、なんまんだぶつ...